北見支部だより

旭川医科大学同窓会 北見支部 支部長
JA遠軽厚生病院
院長 稲葉 聡
（第７期生）

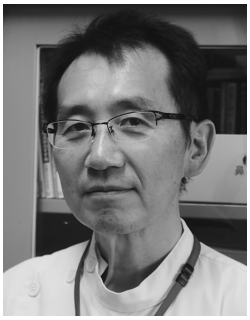
北見支部の支部長をお引き受けして１年が経ちました。2020年は56年ぶりの東京オリンピック開催で盛り上がり、日本勢の活躍を期待して、その結果を肴に北見支部設立総会を開きたいと考えていました。

しかし、新型コロナウイルス感染症の対応に忙殺される日々が続き、あっという間に年末が近づいてきてしまいました。今も北海道第３波が押し寄せつつあり、残念ながら思い描いたような支部の活動ができず申し訳なく思っています。

北見支部の現状は、幹事２名を決めさせていただき名簿作りに着手したところです。北見支部は面積も広く、大きく分けて北見地区、斜網地区、遠紋地区の３つになります。北見地区の幹事は、第８期生の山本康弘（北見小林病院）君に、斜網地区の幹事は第９期生の梶野浩樹（網走厚生病院）君にお願いし、快く引き受けていただきました。ありがとうございます。

当院には現在、後期研修医６名（第３内科３名、第１内科１名、消化器外科１名、小児科１名）が勤務しています。写真は、後期研修医５名（１名は救急処置中で写真撮影できず）と私です。若い力が、遠紋地区の地域医療を支えています。これからの地域医療を担う後輩を応援できるような同窓会支部活動を目指していきたいと思っています。

来年2021年には、何とかコロナ禍が収束して、開催されるであろう東京オリンピックの結果を肴に北見支部設立総会という名の楽しい“飲み会”を開きたいと思っています。北見支部に属するであろう同窓生の皆さん、よろしくお願いします。



岩手支部だより

尾形 文智
（第 11 期生）

昨年の同窓会誌によると、岩手支部には24名の会員がいるとのこと。僕は岩手医科大学およびその関連病院で働いた経験がないこともあり、その半数の先生方とも面識がありません。もちろん、14期卒くらいまでなら皆わかるのですが・・・。今回は岩手支部長でもある同期の中陟克己君（岩手医科大学 医学部 生理学講座 統合生理学分野教授）からの依頼で執筆を担当します。

約１年間におよぶコロナ禍のさなか、ここ岩手県は幸い感染者数が全国最低で推移しています（10月時点で24名）。しかし、全国の医療機関での過酷な状況は連日のように入ってきますから、診療実態とはかけ離れて態勢づくりやマニュアルがどんどん更新され、どこの医療機関でも情報太り状態です。不謹慎なたとえですが、「実戦経験はないが、籠城の構えは万全」な状態なのに、緊張し続けたためにたたかう前から既に疲労が溜まっている状態です。「専守防衛」とも言えなくもありませんが、実はリ

アルな攻めにはとても弱いのではないか？と懸念しています。

さて、私事で恐縮ですが、不覚にも２月に脳梗塞を発症し岩手医大のSCUに救急搬送されました。さらにその際の精査にて無症候性心筋梗塞を指摘され、早期の治療を勧められました。様々悩みましたが、卒年同期を中心とした多くの仲間のアドバイスや励ましを受けて、４月（この頃岩手県ではCOVID-19感染者数はゼロでした）に岩手医大でCABGを行いました。２度の入院中、もちろん附属病院は全館原則面会制限なので、入退院時以外家族にも会えなかったのですが、そんなルールをものともせず、スタッフ通路から差し入れをもってお見舞いに来てくれた中陟君と、齋野君（13期 同 解剖学講座 細胞生物学分野 教授）にはとても励まされました。そして、心臓血管外科入院中の主治医である坪井君（15期、ラグビー部）には様々配慮いただき感謝しています。

患者発生は少なくとも、感染対策のフェーズは全国区です。皆、医療者・病院管理者として「不要不急の外出や集会（飲み会含む）、県をまたいだ出張」などを制限している立場でもあり、今年は支部（同窓生有志）の集まりが全くできなかったことは心残りです。もちろんまだまだ油断は禁物ですが、来年の今頃には、仲間と色々な経験を持ち寄って、今の苦労を笑い飛ばしたいものです。

令和２年 新潟支部だより

旭川医科大学同窓会 新潟支部 支部長
新潟県立坂町病院 院長
本 間 則 行
（第４期生）

全国の旭川医科大学医学部医学科同窓会会員の皆さまの中には令和２年２月からの日本におけるCOVID-19への対応に追われ、困難な状況に置かれている方もいらっしゃるのではないかと推察しております。日々のご努力に敬意を表するとともに、一日も早くCOVID-19の流行が終息に向かうことを祈っています。さて、ここ新潟県においてもCOVID-19の発生県内１例目が２月29日新潟市で確認されました。スポーツクラブの卓球教室に関係したクラスターの発生がみられ、県内の感染症指定病院を中心に入院治療が行われました。私の勤務する県立新発田病院も感染症指定病院でしたので、患者受け入れがありました。新潟県ではその後７月から８月にかけて第２波と思われるCOVID-19患者の増加がありましたが、首都圏に比較し落ち着いた患者推移を示していると考えられます。私は、令和２年４月から県立坂町病院という県北部の村上市にある地域密着型病院の院長として転勤しました。着任後、新しい病院でのCOVID-19感染対策や種々の事務作業に翻弄されました。特に令和元年９月に厚労省が発表した地域医療構想における再編・統合の議論が必要な全国の公立・公的医療機関424か所の一つに当院も指名されたため、令和２年９月までに態度を表明する必要があったわけですが、COVID-19の流行により結論は先延ばしになっている状況です。私の勤務している病院のある村上市、関川村、胎内市は、食と温泉に恵まれた地域で、鮭、岩船米コシヒカリ、村上牛、日本酒（〆張鶴、大洋盛）、瀬波温泉、荒川狭温泉で有名です。お近くへ旅行の際は、情報を提供させていただきますので気軽にお声掛けください（nhonma-npr@umin.ac.jp）。写真は、胎内市にある名刹乙宝寺（おっぽうじ）へジョギングした時のものです。

新潟支部の唯一かつ最大の活動である年１回（11月開催）の総会はCOVID-19の流行に鑑み、早々に開催延期が決まりました。同窓会員の親睦をはかり、各年齢層間の情報交換の役割も担っている総会の延期は残念でなりませんが、COVID-19終息までの会員諸氏の健康と健闘を願っております。今後も副支部長の斎藤亮彦先生（５期）および丸山弘樹先生（６期）、幹事 青木正先生（12期）とともに新潟支部の発展に尽くしたいと思います。宜しくお願い申し上げます。